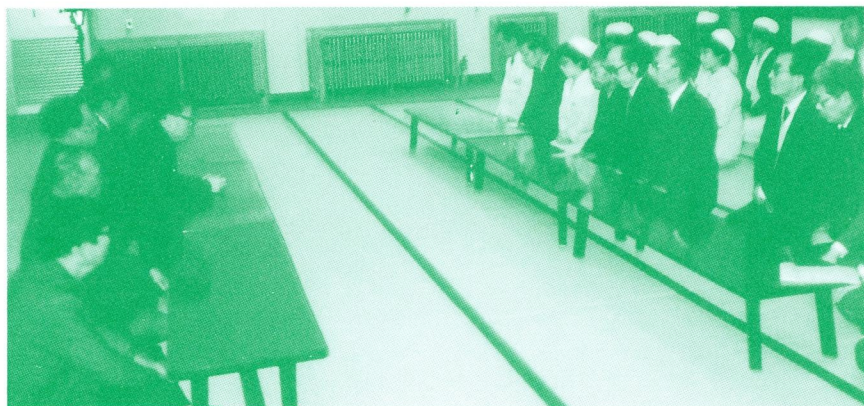


甲田の裾

KŌDA NO SUSO

1号





園当局幹部と自治会執行部との新年賀詞交換会



甲田の裾 第1号 通巻518号 目次

親睦会役職員紹介……………	4	「古い」を考える(2)……………	後藤 昭……………	21	新年に寄せて……………	蝦名 忠蔵……………	16	一九八八……………	喜田 真司……………	15	今世紀の医学・アナログとデジタル……………	戸嶋 秀弘……………	13	新春雑感……………	大高 竹志……………	11	新春に思うこと……………	今野 稔……………	8	新 春……………	小枝 幸……………	7	新春に思うこと……………	伊藤 晃……………	6	就任の御挨拶……………	井上 茂夫……………	5	新春に想う……………	伊藤 文男……………	3	新春に想う……………	阿部 鹿次郎……………	2				
あの遠い日から(四十九)……………	菊池 盈……………	24	欣求俳壇……………村上三良選……………	17	現代名前考……………	齊藤 竹……………	10	身延のかがり火(十七)……………	野中 武……………	27	みちのく集……………佐藤静良選……………	17	銀鱗の思い出……………	今野 稔……………	8	通信歌評……………成田小五郎選……………	18	新 春……………	小枝 幸……………	7	シンガポール・インドネシアの十日間(八)……………	大高 興……………	30	明鏡……………白樺短歌会……………	19	新 春……………	伊藤 晃……………	6	津軽の雪ッコ……………鈴木可香選……………	20	新 春……………	伊藤 晃……………	6	長内恵美子……………	28	新 春……………	伊藤 晃……………	6

写真 天地聖一・カット 成瀬 豊



松丘保養園

園長

阿部 鹿次郎

外職員一同

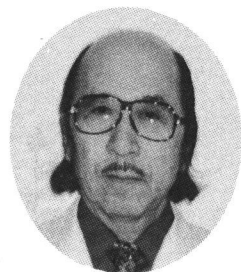
入園者自治会

会長

伊藤 文男

外入園者一同

甲田の裾編集局一同



新春に想う

阿部 鹿次郎

(本園園長)

新年あけましてお目出度うございます。

当園に着任して、まる二年過ぎた。一年目は、何が何だか分からないうちに過ぎた。二年目になり、やや落ち着きをとりもどし、少し余裕をもって周囲を見ることが出来るようになった。ただ自分の至らなさを反省することのみ多い一年だった。

年令の故か、ものを書こうとすると、昔の想い出のみ、目先にちらついてくる。

私が幼稚園に通っていた頃、大正末期に満州の鉄道員だった父は、朝鮮との国境に近い四台子駅に勤務していた。父は趣味の多い人だったが、特に狩猟を得意としていた。雉子打ちの手腕は猟犬の良し悪しによってきまる。イチという真黒のポインター種が父の自慢だった。人に乞われれば、イチを貸していた。或る時、イチは隣駅の鶏冠山の町の警察署長に借りて行かれた。ところが、二、三日して、そこを逃げ出した。警察署長は電話で父に報告して恐縮していた。イチは間もなく鶏冠山の東隣りの駅、秋木荘のホームに姿をあらわした。父の猟仲間、の職員が見付けて、父のところへ送り届けられた。イチ

は汽車に乗って一つ目の駅に降りたのは良かったが、反対方向の汽車に乗ったのだった。その後イチは数年して、新京に近い郭家店で老死した。

私が小学校五、六年の頃、郭家店の社宅の近くに野良犬が住み着いた。茶色の毛並みの美しいセッター種で、すばらしくスタイルの良い犬だった。私は、ペスと命名した。ペスはいつも私にまつわりついていた。汽車通学の私を駅迄見送っていた。そのうちに、私と一緒に汽車に乗り込むようになった。およそ一時間汽車にゆられて公主岑駅に着く。私は、駅前の小学に登校する。そこで、ペスと分かれる。午後三時頃、下校の時間になると、ペスは汽車のホームに姿をあらわす。その間、どのようにして時間をつぶしたのか分からない。私が奉天の中学校に入學して家を離れてから、ペスはいつとなく姿を消したという。

のんびりした、良い時代だった。想い出はきりが無い。さて、今年こそ、二年間の経験を生かして、入園者の皆さんの健康と幸福のため、多めに頑張りたいと思っている。



——この文は、新年一月一日より発足する入園者自治会（親陸会）会長の就任の挨拶で、園内放送を以って一般会員に述べられたものです——

就任の御挨拶

伊藤 文 男

（自治会長）

親陸会々則に基づく自治会役員の交代は、新年一月一日を以って行われ、明日から新年度の執行委員が発足する訳であります。不肖私が引き続き会長に就任し、既に発表してあります各執行委員と共に明日から執行委員会を担当することになりました。

就任に当り一言御挨拶を申し上げます。

先ず過ぎし此の一年を顧りみますと、二月の新管理治療棟の竣工開棟に始まって、緑化委員会の設置と事業の推進、縫工関係作業の返還、四週六休制の試行実施、十二年ぶりの親善交流の復活等々、多事多難な一年でありましたが、会員の皆様の多大なる御指導、御鞭撻と御協力により、大過なく終了することが出来ましたことに對し衷心より厚く御礼申しあげます。

迎える明年も又何かと大変な年であろうことが予想されます。

さて当面の私達の関心事であります昭和六十三年度の国家予算については、五日間に亘る復活折衝を経て、一昨々日の二十八日政府案の決定を見ましたが、防衛費の

突出した伸びに比較し、私達に関係する社会福祉に対する締めつけは誠に厳しいものがあります。社会保障関係全体の伸びは二・九%であります。その中でハンセン病関係は、三・七%の増要求に対して二・二%の伸びにとどまっております。しかし私達の運動や関係者の一定の理解の中からそれなりの成果もあげております。病床数は要求段階から二二〇人の減であります。医療関係費、施設整備費等については一定の前進がありました。入院委託治療費九・三%の増、医薬品等購入費一一・三%の増で、しかもこれは要求通り満額であります。とりわけ過去七年间据置かれて来た医療機器整備費は八年目にして九・九%の増となりました。又、長島架橋関係分を除くと四年続けて減額されて来た一般施設整備費についても、五年目にして歯止めがかかりました。内需拡大の為公共事業費は一九・七%と大巾に増額するという政府の方針に連動していることは容易に推測出来ますが、全額にして二億一、七一九万五千元、率にして五・二九%の伸びはやはり特筆すべきものと思えます。職員増

員については、増員三四人、減員二一人、差引き純増一三人という結果であり、やはり厳しい情勢が伺われますが、しかし昭和六十三年度に於いて国家公務員の純減三六五五人を目指す政府の方針の中にあつては、大きな前進という見方も出来ましよう。

内部的な自治会運営に關しての当面の課題はやはり、リハビリや高令者対策を含む医療の充実と施設整備の促進でありましよう。永年期待されております眼科常勤医師の確保については、今年も目の目を見ずに終りました。が、明年も引き続いて力を入れる必要があります。リハビリ対策の確立については、今年幸い理学療法士と助手が採用され、併せて六十二年度整備に於いて機能訓練棟も完成致しますので、愈々中味の充実に向けて関係者の努力を促したいと思います。高令者対策については、これ迄ともすれば残存機能の活用やボケ防止等の側面から、いわゆる生甲斐対策といった面からの保健科活動が重視されて参りましたが、これからは病棟に於いて重症者との同居がとかく問題になっております。寝た切りや痴呆症の老人の為の対策が考えられねばなりません。私共と致しましてはその為に第二病棟の更新築と相俟つて、老人病棟若しくはこれら老人の為の準病棟的なものを要求して来ておりますが、看護婦や介護職員確保の困難性から一朝一夕には実現出来難い実情があります。当面は六十三年度のトップで要求しております独身特重棟の整備を進める中で、その一部を老人病室として設けるという

方法を、暫定的なものながら考えてみる必要があります。施設整備については申すに及ばず、取り残された木造の居住棟や、諸施設の改修改善や、友園各施設の例なども見習いながら、数多くの先輩療友が眠る老朽化した納骨堂の更新築も急ぐ必要があります。

此の他三月に予定されている定年退職者八名の完全後補充や、四月一日から予定されている四週六休制の本格実施に対応する為の職員の増員、スタートした緑化運動の更なる発展推進、今春来頻発している不自由者棟に於ける盜難事件の反省に立つての金銭管理の問題なども当面の課題であります。

いろいろと難問山積の折、微力ではありますがが会員の皆様の負托に応えるべく鋭意努力する所存でございますので、一層の御指導御鞭撻そして御協力御支援を賜りますよう御願ひ致し、就任に当たつての御挨拶と致します。

それでは皆様御元気で良い新年を御迎え下さい。

昭和六十三年親睦会（入園者自治会）役職員紹介
会 長 伊藤 文男 同非常任委員 天地 聖一
副 会 長 菊地 正実 用度常任委員 福島 政美
経理常任委員 坪田多三郎 同非常任委員 佐藤 久雄
同非常任委員 伊東 実 書 記 平内 かよ
厚生常任委員 根岸 章 同 桂田 博祥



新春に想う

井上茂夫

(本園副園長)

松丘保養園のみなさん、明けましておめでとうござい
ます。ここ松丘の地で新春を迎えるのは、数えて五回目
になりました。この間ボイラー、洗濯棟、医務本館、治
療棟等の木造建築が無くなり、寮舎や公民館の新築、管
理治療棟の落成移転で様子が一変しました。加えて現在
でも、福祉室及び理学療法棟の新築工事の槌音が、高ら
かに響き続けている。雪消えて春四月、新たな装いを見
せてくれることを楽しみに・・・

昨年一年、海外においても色々ニュースがありまし
た。全地球、全人類が待ち望んでいるINF削減の合意
が、ワシントンで米・ソ両首脳によって合意され、ほん
の小さな一歩ではあるが、核兵器廃絶への入口にたどり
ついた感を与えてくれました。宇宙平和を祈願するもの
として、引き続き本年のモスクワでの米・ソ両首脳の会
談により多くの期待をかけたいものです。

南ア航空・大韓航空の墜落事故も昨年の十大ニュース
に挙げられるでしょう。キナ臭い噂も漂う中で、はたし
て真相は究明されるのでしょうか？

それにしてもこの円高の状態は何時まで続くのだろうか

か？金のない庶民には無関係の様ですが、アメリカから
は貿易不均衡を責められ、内需拡大を迫られて、新内閣
の船出は容易ではなさそうだ。円高にしても貿易黒字に
しても、一般国民に還元されているでしょうか？

米、砂糖、牛肉、麦、洋酒・・・どうして日本国内
ではこんなに高値になっているのでしょうか？台湾では
百円（日本円でですよ）で食事がとれると聞いたら皆さ
ん信じますか？日本円の強さ、有難さは国外へ出ないと
体験出来ません。

毎年のことながら、今年も又、より良い年である様祈
りを捧げたいと思います。

西暦二千年まで残るは十二年、二十一世紀はそこまで
来ています。

皆様、お互いに健康に留意し養生して、二十一世紀を
一緒に迎えましょう。



新 春

—和氣藹藹—

伊 藤 晃

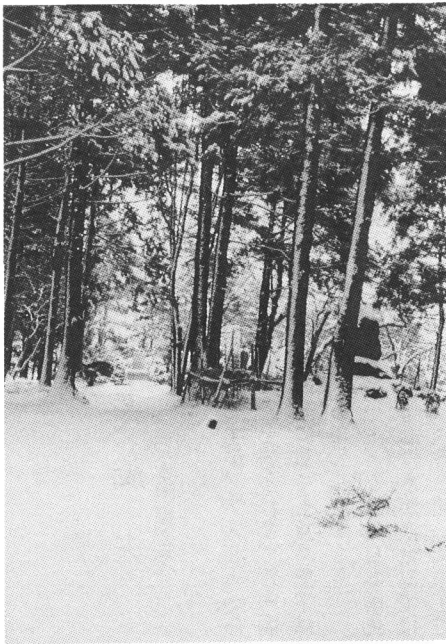
(本園事務長)

新年おめでとうございます。卯年が去り、十二支の中では唯一の想像上の動物である辰年をむかえました。辰
|| 竜、いろんな言葉が浮んで来ます。竜宮・竜王・竜神
・ 竜虎……いづれも悪(ワル・アク)には縁遠い最善・
最良・最強のものと云う意味に用いられております。一
方、上り竜・下り竜からは、荒れ狂う勇者の姿が想像で
きますが、これは「波乱万丈」につながる。

当園の今年は決して波乱万丈であってはならず、平穏
でもしかも和氣藹藹のうちに一步一步着実に進歩を求めて
行かねばならない。

医療や福祉を取り巻く情勢は、内需拡大のかけ声には
追いつけず、息切れ状態で青息・吐息である。そんな中
で竜宮を求めて進むには、心だけは豊かに歩まねばなる
まい。

平穏・和氣藹藹では消極的にすぎる、と思われては困
る。あくまでもその姿・心意気は竜神であり竜王である。
今年は待望久しかった独身特重寮新築の槌音が聞かれ
ると思う。竜宮には、ほど遠いけれどその入口程度の趣
きには接することができると思う。



私の初夢も竜頭蛇尾に終わることのないよう、更に努
力を続けたいと考えており、どうぞ皆様のお力添えを賜
わりますようお願い申し上げます。
当園にとって、又入園者・職員の皆々様にとって、よ
り幸せ多い年であるよう祈って新年のごあいさつとい
たします。



新年に思うこと

小枝 幸
(本園総看護婦長)

あけまして、おめでとうございます。

昨年は、新年早々に治療棟移転の準備にとりかかり、二月のきびしい寒さの時に引越しとなりました。この際には職員はもちろんのこと、患者さん皆様の大的なる御協力を頂いたおかげで無事終了することが出来ました。その後も冬期間、慣れない治療棟に足を運んで頂き、その上何かと気苦労をおかけ致しました。幸にして大過なく一年を迎えようとして居りますが、心から喜ぶと共に厚く御礼申し上げたいと思います。

新しい年を迎えるにあたりまして、いろいろ不行届の点があると思いますが、私共なりに看護の原点に立ちかえり、「みどり」のことはふまえ乍ら努力して参りたいと思つて居りますので、よろしくお願い申し上げます。

昨年のもうひとつのことは、師走に入りようやく開設に至りました保健科のことでございます。これまで、本当に永い間おまたせしてしまいました。まだまだ不十分の状態でございますが、福祉室、栄養班、看護課と各々に曜日をかえて担当致します。お互いに連携をとり乍ら、ケースワーカーとのかかわり、食餌に関する相談、疾病

に関する相談等々、種々模索する中で、話し合い乍ら、学び合い乍ら進めてゆきたいと思つて居りますので、この事に関しまして、お意見を頂き乍ら少しづつ、役立つ方向に努めて行きたいと思つて居りますので、大いに活用して頂ければ幸と思つて居ります。

今年に關してお願いしたい事を申し上げますと、此の冬は大雪になりそうな思いもするわけですが、不運にみまわれない様、予防に気をつけて頂きたいものと思つて居ります。

一、かぜ・骨折でねたきりにならない様に、

二、おっくうがらず体を動かす、歩く、

三、イライラ・クヨクヨせず心に平安を、

四、本をよむ・話をきく・物を書く、

これらの事柄にお互いに注意し努力し合つて頂ければ、少しでも不運はさけられると思ひます。他人の上だけを見るのではなく、下を見るように心がけ、今日がだめなら明日の日を、明日がだめなら明後日と希望を失なわないうようにし、一日一日を大切に、小さな事にも幸福を味わい乍ら、豊かな満たされた日々をお過ごし頂きたいものとお願ひ申し上げます、本年の良い年を祈らせて頂きます。



銀鱗の思い出

今野稔

(本園事務長補佐)

皆様新年おめでとうございます。私の干支でもある卯年から辰年に変わりました。以下干支には何の関係もなく、少々趣を異にするかも知れませんが、銀鱗に関する私の密かな思い出を紹介してみたいと思います。

そもそも銀鱗とは銀色に輝く鱗という意味ですが、磯釣り仲間では通常、黒鯛として通用しているようです。私はかつて、今から十七年程前、山形県庄内地方のS療養所に勤務したことがあります。同地方では初釣りと呼んで正月早々から黒鯛釣りが盛んに行われていました。また、同地方の日常会話で「最近どうですか」といった言葉をよく耳にしましたが、これは「磯釣りに行ってるか」とか「黒鯛を釣りあげたか」という意味であり、大方それで話に通じているようでした。即ち、それ程磯釣りが盛んであるという事に通ずるものと思います。とにかく、大人も子供も、時には女性までが磯釣りを競い合っているかのようで、その熱の入れようは他では見られません。それ程までにごうして磯釣りが盛んになったのか不思議に思っていたらそれなりの理由があったのです。釣り場に恵まれている点は別として、その昔、侍時代に

食糧事情が悪かった頃、当地の領主が、蛋白質を海に求め、併せて片道一時間程の道程を歩く事によって健康増進を図る目的で住民に磯釣を奨励したというのです。最も現在はレジャーとして定着しているようですが――。

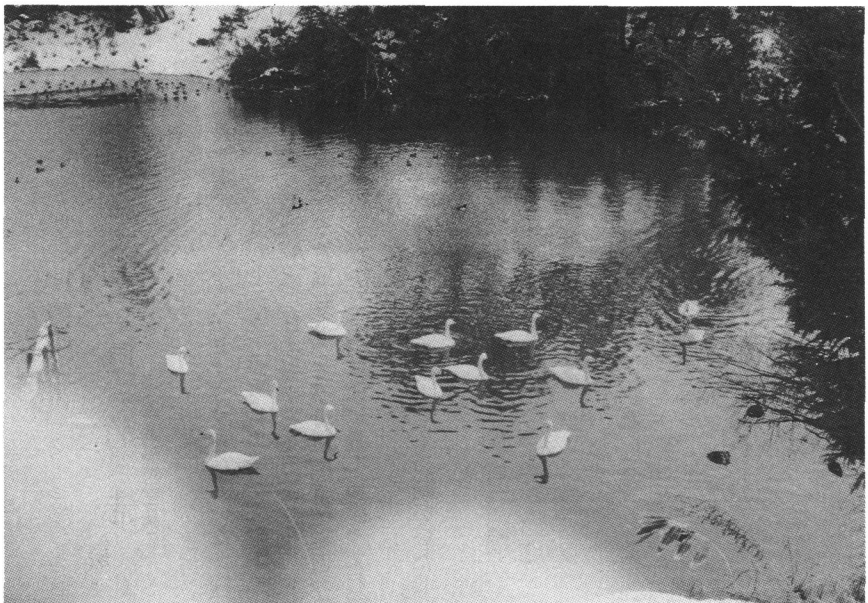
さて、前記のS療養所にはK氏という人がいて、そのK氏は、黒鯛釣りでは右に出る者がいない程でした。私も元来、釣りには興味があったので、K氏に磯への同行を頼んでみたところ、K氏は心良く引き受けてくれましたが、その後なかなかK氏から声がかからず、しびれを切らした私は、K氏に尋ねると、黒鯛釣りは一日一寸と称して十日磯に通わないと一尺のものを仕止める事ができないという程難しく、条件の揃わない時は、行っても無駄というのです。

九月も半ば過ぎた頃、K氏も丁度休みの日曜日の午後初めてK氏から誘いがあり、私は逸る気持を抑えて車に乗り込み、K氏と二人で二十分程で釣り場に着くと海は少し荒れていました。秋からの磯は、時折予測もしないお波浪が押し寄せるというので、安全を確かめてから釣り座に陣取り、K氏の指導で竿を振り込んだのは夕方近

くでした。タバコに火を着け待つ事暫し、私の竿先に微かながら確かに異変が起きました。と思う間もなく、竿先が海中に没する程の強引な引き込みがあり、リールがキリキリと鳴って糸は沖の方へ出ていきます。K氏は慌てるなど言うが、私の鼓動は高鳴り足はかくかく震えてどうにもなりません。K氏の助けを借りてやっとの思いで引きずり揚げてみると、それはいぶし銀のように輝く粉れもない銀鱗でした。後で計ったら尺五寸ありました。これが私にとって初めての黒鯛の感触であり、忘れ難い銀鱗の思い出となったのです。

その日の獲物はそれだけでしたが、私には充分でしたし、K氏も責任を果たしたという思いが満足そうでした。そして、夕闇迫る頃竿を納め、充実感に満ちて家路を急いだのです。その後何度も黒鯛釣りに挑戦して、それ以上の大物にも出合いましたが、やはり初めての感動が一番強く残っています。何事も最初の印象が強く残るものだと今更ながら痛感しています。そうした思い出があつて魚釣りは、獲物の有無に拘らず、今では私のストレス解消にも役立っています。

私の初釣りはいつになるかわかりませんが、ストレス解消を図りながら、本年も業務に精進したいと考えていますのでよろしくお願いいたします。





新春雑感

斎藤 竹志

(本園福祉室長)

新年あけましておめでとうございます。

入園者の皆様のますますの御発展と御健康をお祈りいたします。

本年は辰年でございますが、竜(タツ、リョウ、リュウ)は、西洋ではドラゴン、概ね悪るものであるが、東洋では竜王、竜神、竜宮、竜顔などと最良、最善のものにつかわれている。

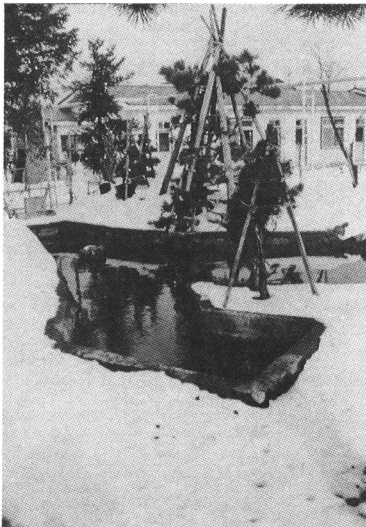
竜は天上、海中、地底の三界に住み、らくだ、しか、おに、うし、へび、みずち、こい、たか、とらに部分的に似ているので、「三停九似」と云われ、雲をおこし、雨を呼び、水にくぐり、天にのぼるとされている空想動物である。

子供の成長を願う親達は竜虎のように勢いある逞しい人物にと思い、又架空の世界に想いを馳せる芸術家達は、滝を登りつめると竜になるといふ古事に習い、鯉の滝登りの絵を描き、上り竜、下り竜の彫刻に精魂をこめたのである。

昨年十月一日付で、私はふたたび当園にお世話になることになり、三回目の冬を過すことになりましたが、ハ

ンセン病療養所も定員と予算がますますきびしいなかで、職員と入園者一人一人がしっかり手を取り合い、話し合い、よりよい園にしたいと、微力ながらも今迄以上の使命感を培い、大いなる希望をもって、着実に目標に向って、「竜頭蛇尾」にならないよう、年頭に際し頑張ってくださいという気持ちになっております。

本年も入園者の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。





現代名前考

大高 興
(本園内科医長)

昨年十月某日、青森市郊外の雲谷(もや)の山へ茸狩りに出掛けての帰り途、日頃懇意にしている農家に電話を借りに入ったが、その家の子供(小学生)に「僕が生まれたとき、先生が僕に名前を付けてくれたんだ、と親から聞かされているが、名前のいわれを教えてください」と尋ねられた。

とっさの事とて、それに疲れてもいたせいか、どうしてもその子の名前を思い出せなくて大変困ったことがある。

さて、私事で恐縮であるが、私の名前は興(こう)と呼ぶ。

どなたでもそうだと思いが、遠い少年少女の頃は、自分の名前に不満を抱いたり、どうしてこんな名前を付けたんだろうと疑問を持ちたりするものだ。私もその一人と見え、中学一年の頃、自分の名前の由来を父に尋ねたことがある。その頃は、心の中で「家を興(おこ)し、国を興すような立派な人になってくれ」と、生まれたばかりの可愛い？わが子に、両親が知恵をしぼり願いをこめて付けてくれたかも、と、あわい期待感を抱いていた

のだが、父はホロ酔い機嫌で言うには「関東大震災の復興宝クジを買ったら幸運にも少しばかり当たったので、それを記念して復興宝クジから興という名前を思いついた」と。

子供ごろにガッカリしたのを今でも忘れない。だから、子供に対しては励みになるような名前のいわれを、こじつけでもよいから日頃考えておくべきだと私は思っている。

私が日頃尊敬している青森市の書道の大家、宮川翠雨先生(故人)は、自分のお孫さんに名前を付けるべく、いろいろ考えたすえ「歩(あゆむ)」という名前にしてはどうかと。すると若い両親は、歩という文字は、将棋の駒では一番下っ端だから、イヤだと言って拒否したとか。そして結局は「興」という名前にしたという。

かつて私が開業していた頃、時々変わった名前の人が来たものだ。女性では「そく」さん。当人は、子供の頃から同級生に「そく」をさかさに読まれて、くそ、くそ、と馬鹿にされて大きくなったとか。「いな」さんは、大勢の男の兄弟の中に、女の子として生まれたので、両親は

非常に喜んで、いいなアが「いな」と名づけられたそうだが、本人にとっては少しも良くない、とコボしていた。私の生家、木造町（きづくり）を「もくぞう」と読んだ新人類がいる）に住む四人姉妹の名前が「とよ」「とみ」「ひで」「よし」。その父親は酒を飲んで酩酊すると、きまって豊臣秀吉がわが家におると言っっては自慢しているのを聞いたことがある。

村の役場の戸籍係の文字が粗末だったため、両親がせっかくな、そよ風の如く「そよ」と名づけてくれたのに、戸籍簿に「ろよ」と記入されてしまった女性患者もいた。さて、当節、名前に字画数が大へん幅をきかせているようだが、字画には、人の一生を左右するほどの科学的根拠があるのか、甚だ疑問である。

私の尊敬する人名研究家で高名な佐野透氏によれば、「字画数が違えば吉運変じて凶運となる……などというバカげたことなど絶対にあり得ない」ということは、実をいえば、人名研究家などと自称する彼等自身が一番よく心得ているのではないでしょうか。殆どそれを百も承知の上で（ゼニもうけ）のために、他人様（ひとさま）をおどかしているにすぎないのです。ただ、最近の人は、昔風の単純なおどしには乗らなくなつたので、なるべく近代的、科学的な（化粧）をほどこしているだけですヨ」と。

しからば良い名前の基本的条件とは何かと言うと、先ず第一に（平易さ）でしょう。つまり、読み易いこと。

言い易いこと。聞き易いこと。書き易いことの四つの条件が理想的でしょう。第二には（字画）じづらにばかりこだわらないで（音）おんとして聞くということも大切でありましょう。殊に日本は、今後ますます世界の日本として、若い人達が国際的に雄飛すべきことを考慮すれば、無視できない基本的条件と思われるが如何でしょうか。

「言いにくい名前は大成を妨げる」といういわれを念頭に置いて、名づけ親を頼まれた際には、良い名前を付けてあげるように心がけたいものです。

今年もよろしく。





今世紀末の医学

アナログとデジタル

戸嶋 秀弘
(本園研究検査科長)

編集子、天地氏のもとに應じ最近考えていることを述べてみますが、手元に文献がないので多少の誤りがあると思いますが御容赦頂きます。

時計の話をしめます。従来の長針と短針を用いた時計はアナログ時計、連続しています。分毎に区切って数字で表示する時計はデジタル時計、続いています。不連続です。数字表示と針の両方をもつものはデジアナまたはアナデジといえます。

田辺元、という人を御存知でしょうか。大正末期から昭和中期?まで活躍した哲学者です。科学概論という本を書いています。大分よまれた本なのでしょう。私の家にはこの本が三冊ありました。父や叔父が読んだものです。読んでみました。大抵のことは忘れましたが、要旨は科学には階級があるということでした。先ず二つに分けます。文化科学と自然科学です。文化科学の第一位は詩で、自然科学の第一位は数学でした。詩と数学は努力して出来るものではなく、わずかの天才が創るもの、生まれさせるものです。第二位は物理と化学でした。生物学(医学も含めて)は記述科学でしたので第三位でした。第三位の医学を第二位に高めたのはマックス・デルブリック等です。生物を機械とみたてたことです。機械

が動くには動力—原因—が要ります。その結果動きます。これを因果律といえます。

この物理学の応用ではCT・MRI・超音波診断です。化学では遺伝学をはじめ分子生物学です。高単位栄養はこの両者の応用でしょう。おどろくべき進歩です。二位を越して一・五位ぐらいになったでしょうか。

細胞があります。之を一つの部屋と考えて下さい。この中に主人—核—が居り、数人の家族—オルガネラ—が居ります。部屋には壁—細胞膜—が必要です。この細胞が力をあわせて周囲—細胞外液主として血液から栄養をとって生きています。

血液には赤い血—血球—と黄色い血—血漿(血清)があります。今ではこの血清をほんの少し(0.1〜3cc)血液の血清、血球比は1対1。採血の際は二倍の0.2〜5cc)あれば様々なものが測定可能で、これで色々な病気の診断が出来ます。特にホルモンはヤローという女の方が放射線を使ったRIA法で一〇〇万分一gから一〇億分一g更に一兆分の一g(脳下垂体ホルモン)迄測れる様になり、之により診断をつけられる様になりました。昔バセドウ病の検査(診断)には一週間位かかりました。食事制限(海藻禁)後の放射能検査、前日からの安静

(基礎代謝測定)です。ところがどうでしょう。今では微量の血液で一発で判ります。

これまでの事は数字で表示するデジタル時計—学問の定量化(デジタル化)なのです。之が医学を三位から二位にひきあげました。

ところがどうしてもデジタル化出来ない領域もあるのです。消化器の病気で、胃に瘤があるとしましよう。2cmのコブと考えます。滑らかであると、之は良性か悪性か判りません。アナログ(針時計・連続)です。尤もコブに潰瘍があったり凹凸不整であればデジタル(不連続)で悪性です。(現在は生検により0.5cmのコブ迄診断がつきます)。今の所アナデジです。

老人性痴呆、又別な意味では精神病もアナデジです。田辺先生流に云えば前者は依然第三位、後者は、文化、自然科学共第二・五位です。精神科の先生よおこりなさんな。ごめんなさい。

医者の中には極端に因果律を嫌う方が居ります。PSD(精神身体病)学者です。理由はこうです。一つは個人個人別個だということ。もう一つは定量化—デジタル化—がむずかしいことです。併し私は考えます。定量化出来ないのは未だ未分化—第三位で、近い将来には努力によって定量化出来ると思います。この時にはPSD学—第二位—になるのです。

医学が定量化(ホルモン測定・デジタル化)させて第二位になる。患者にとっても医者にとっても有難いことです。内科医はいらなくなります。誰でも診断がつくのですから。外科医は手術がありますから別ですが内科医

は牧師様^{サウ}の仕事(資格は別にして)をやる様になります。最近ホスピス医療が新聞にみられます。どうしても治らない病気を文化科学主、自然科学従で何とか安らかに終えさせることです。裏からよくみれば内科医はかえって難しくなるかも知れません。

ニュートンは光の粒子説(デジタル)を称えました。ホイヘンスは波動説(アナログ)を教えました。ニュートンが余り偉かったのでホイヘンス説は一〇〇年余りも認められませんでした。今世紀になり、ルイ・デュ・ブローイは物質波(粒・波。現代流でいえばデジアナ)の説を出し之を救済しました。

医学も定量化され診断も楽になりましたが、未だ未だ定量化されない—形態学—部分が一杯あります。

医学と医療は紙幣の表裏の様に切り放し難く(デジアナ)協力してやっていかなければなりません。今世紀はデジタル(定量化、不連続、数字整時計)化を強力にすすめ病因を徹底的に極め—今、皆一生懸命やって居りますが—一ること。

二十一世紀にはデジアナが協力、特に文化科学の助けを借りれば精神病もなくなるのではないでしょうか。

一九八八

一九八八年は、タツ年に当たります。龍は想像上の動物であり、中国においては帝王のシンボルとされています。欧米のドラゴンとは違い、めでたい存在となっております。

龍の好きなものは、玉とツバメの肉、きらいなものは、鉄とムカデと笹の葉と五色の糸と伝えられ、天に昇り、龍神となって雨を降らすと伝えられています。

中国では、水の神様と崇められ、旱魃かんばつのある時には、川辺で龍神様を祀り、雨乞いのお祭りが行なわれています。また、龍の姿は貴いものとし、一般庶民は龍の姿を使用する事さえ禁じられていたのです。

ところで、よく見かける龍の絵ですが、両側の大きな角と、後ろにたなびくひげ、そして、人間では犬歯に相当する糸切り歯が目立って描かれています。この様な歯とともに、耳の近くまで開く大きな口を持っていれば、相当に大きな物でも食べる事ができたに違いありません。大人には普通、二十八本の歯があり、それぞれの役割をもって食物を咀嚼しております。しかし不幸にして、三十才を過ぎるまでには大多数の人が数本の抜歯を行な

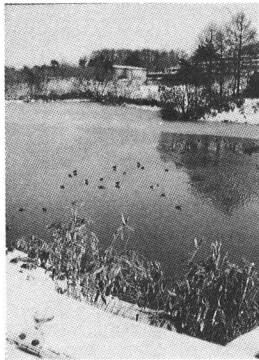
喜田眞司

(本園歯科医)

い、壮年〜老年期になると、多くの人が入れ歯、すなわち義歯を使用しているのが現状です。顎の骨は、歯を喪失すると、きわめて吸収が早くなり、それに従い、数年間顎の骨が変化してしまいます。

現在では、多くの歯を抜歯から救える様にはなっていませんが、まだまだ義歯の使用者は多く、しかも、適切な使用法を守っていない人が多い様です。

龍年は飛躍の年といわれていますが、この様な年にこそ、今一度、自分の口の中に想いを寄せて、飛躍のための原動力としてみませんか。せつかく神様から、口腔という大切な器官をいただいたのですから。





新年に寄せて

蝦名 忠藏

(全医労松丘支部長)

政府自民党は昨年の九月十八日第一〇九臨時国会で「特別措置法」を強行成立させました。今年からその法律が施行されようとしています。そんな意味からも今年は大変な年になりそうです。もう一度「特別法」はどんな法律で政府は何を企てているのかを考えて見る必要があると思います。

年輩の方で、私はあと数年で退職するからそれまで病院があってくれば……。入園者の中で私は年をとっているからあと何年かでもこのままであればよいと云う考え方の人がいたならば、それは大きな間違いです。日本の医療制度を根本から変え、地域の医療を根底から変えようとする政府の「全体計画」に対して、全医労が反対する方針は全く変わっていません。

私達は全国の九割を越す地方自治体の反対決議・四百五十万人署名達成・三者共闘はじめ、数々の地域共闘の広がりにも自信と確信をもって反対闘争をより強化して行かねばなりません。

昨年十月末、国立青森病院を守る会の結成の際に、自民党の津島衆議員は、政治生命をかけても青森病院を守

ると発言しています。県議員も市議員も異口同音に国立病院・療養所の統廃合には反対しています。

十二月十八日の県議会では社会党の浅川議員の発議で「国立病院・療養所の存続と充実に関する意見書」を超党派の全県議員の賛成で採決されています。

昭和六十三年は四週六休が試行から実施に入ろうとする年です。国家公務員の中で全医労だけが四週六休に反対しています。患者サービスの低下と労働条件の低下につながる制度には絶対反対し、増員による実施を要求して行きます。

全医労の松丘支部でも今年度から月二回の執行委員会を定例化しています。支部長も書記長も初めての任務です。全患協との協力を一層強く要請しなければなりません。共闘をより強化して行くつもりです。松丘の将来構想についても一日も早くハッキリさせなければならぬ問題と痛感しています。小さな問題でも一つ一つ解決に向けて活動して行きたいと思っておりますのでよろしくお願ひ致します。

句 欣求俳壇 (十一・十二月)

村上三良選

療園の生活小さな月供え
恙がなきことが何よりさわやかに
療園に四十五年月仰ぐ

田山陽司

いつ来てもこの坂けわし紅葉山
落葉松の落葉の音のさらさらと
散策の鳶の笛きく小春かな

平山幸運子

カセットにかぐらの笛や菊薫る
木枯やみ仏在す高野山

志村満

いくつもの暦いただき年迫る
赤飯に柿二つ付き文化の日
餌のパン白鳥鴨と奪い合う

句 みちのく集 (十一・十二月)

佐藤静良選

散策の日々に色濃き紅葉かな
故郷のそぞろに恋ひし秋の暮
雨読なる句集秋茄子文化の日

田山陽司

展示会終えきて菊のつかれかな
今朝初の白鳥来しと知らざるる
鳴き巡る白鳥の群れ小雪降る

志村満

冬日あび白鳥鴨と泳ぐ沼

平山幸運子

秋まつり森にこだまし宮太鼓
スチームのひと間にいつか読み耽り
雪の夜テレビのドラマ更けてをり

十一・十二月句会

平山幸運子

城跡の菊人形にこの人出

スチームの部屋にサボテン移しけり

田山陽司

霊園の桜紅葉に杖のぼし
療養も四十五年や日記買う

豊崎小石

あひるいる沼も日々秋深む

この雪は根雪となるか今日も降り

志村満

走り去る車追いかけて舞ふ落葉

今年また白鳥の群れ沼にきて

通信歌評

成田 小五郎 選

の戸口明るし

評 主観を入れず克明によんでよく状況を出している。二句は「見よとたびたる」も考えられるし「挿せる」は「挿して」とした方がよいかと思う。「挿して初冬の戸口明るし」が一首をひきたてている。

矢島 忠

佐藤 一 祥

三人の妹弟揃ひ会ひに来て互ひに話し交しあひ居り

評 淡々と気持をおさえて詠んでいて、よく分り気持の出た歌であるが、下の句は少し平板になったようにも思う。例えば「三人の妹弟揃ひ会ひに来て互ひに交はすこゑに和ぎをり」なども一方法かと思う。

根岸 章

のみどの管指に押へてカラオケに声出し唄ふ言ひたる人が

評 「のみどの管」は分りづらいたるところもあるけれども、四五句の「声出し唄ふ言ひたる人が」は地味な表現であるが読者に訴えるものを持っている。いい歌だと思う。

松 永 不二子

義肢吾に見よとてたびし赫きもみぢ挿せる初冬

ライ園に有毒無毒の区別なく未来は近く治療棟建つ

評 この歌もよく分る一首で苦心作と言ってよいかと思う。「有毒無毒」はこれでいいのかとも思うが「有菌無菌」は如何かと考えられる。そして「ライ園に有毒無菌の区別なき未来は近く治療棟建つ」としたように思う。

滝田 十和男

サルビアのまだ色失せぬ花むらに化粧せる雪ほどなくて消ゆ

評 サルビアの花に雪の降った状況を把えた一首。「化粧せる雪」のところは「化粧せると雪ふりて消ゆ」とした方が直接にひびくのではないかと思う。そしてみるとこの一首は相当のものと言ってよい。

短歌

白樺短歌会

矢島 忠

部屋ぬちに紐めぐらせる虫干しの衣類の下に昼寝むさぼる

肉親にあらねど三十七年間看とりし媪の葬ひをする
金色の霊柩車を使ふ第一号となりて媪は斎場へゆく

松 永 不二子

松が有る故地名松丘となりしとふ丘浮きたたせ夕焼に映ゆ
しみじみと包まれて居たく夕焼に佇てば「どうしたの」

と声掛けられぬ
右から左に購ひ得るも自家製の味が欲しくて味噌漬つくる

加賀谷 幸 蔵

離り住む孫の運動会に旅立ちぬ秋たけなはの稲刈り最中
余念なく支度にかかる妻は先づきりたんばやらに比内どり肉など

異郷にて地方訛りも恥はせず走る孫等に必死の応援
必死なる応援が通じてか走る毎二人の孫等は先着にゴールす

一週間は矢のやうに過ぎて帰路に発つ再会を約し孫等と別る

古きには秘境の地なる萩形で村の紅葉祭が終日賑はふ
取入れも大方終り輩等と「萩形ダム」にてひと日戯る
目のあたりもみじの光景に人等酔ひ酒酌み交す萩形の里
大豆挽きも辛き仕事となりし齢赤字を見込す豆脱機購ふ
米代金を担ふ商魂か新聞受けに折込みちらしが頼に数増す

滝田 十和男

愛姫のふるさとなればことのほか賑わう春の便りつぎつぎ
空白の我が五十年ふるさとに心戻して満ち足らう日々
ひとはみな老ゆるに及びふるさとを身近なものにして果
ててゆく

春の風鳴りつつ渡りくる沢の木立も雪に痛みたるあり
悪しざまに陰にのしる愚かさをこころ淋しくなりて聞
きおり

生々しく世を生きるさえ羨しとは思わぬまでに病み崩れ
たる

森近くありて小鳥の声きかずいたどりの芽の紅く萌ゆるに
芋を蒔くひとの畑に見ゆる間の土あたりしき陽炎の立つ
健やかに在れば一人の農夫にて老いづく吾かさだかなら
ねど

待ち兼ねし花の一夜に咲出してあわただしもよ園のめぐ
りは

色うすき水仙の花咲くままに空家となりし部屋のしずけさ
こもり居の吾れに眺めの限られて丘の路ゆく車の速し
丘を行く車そのまま空駆けるものごとくに吾に思わす

明鏡集

鈴木可香選

遠藤芳富

今日もまた頼みますよと義肢を撫で
義足にも神経がある足の裏

散歩道杖と二人で落葉踏む

手を貸してあげ年寄りに拜まれる

責任をみんな果たした日の朝寝

面会の母と並んで菊に立つ

太田千秋

赤トンボ唄えば浮かぶ里の秋

歌を聞く耳は持つてる上手下手

頑固でも逝ってしまえば惜しい父

良く炊けたご飯焦げまで賞めて食べ

友達者ゲートボールへペタル踏む

何センチ降ったと雪を言い聞く

(職員) 奈良良やゑ

上野駅モダンに変わり活性化

初冬の庭に山茶花咲きほこる

残り物に福を求めて宝くじ

山の宿蛇泳いでる露天風呂

注意したことを気に病む老婆心

謙虚な生き方母に褒められる

茅部ゆきを

湯豆腐をうまくいただき秋深む

薄幸な女をめぐって秋の風

戻らない日日の一日大じにし

耳に栓して老婆の愚痴を聞く

上役へ言える限度をわきまえる

猪狩子面坊

煩わしいものに便器の使い分け

城跡に藩主のその名世の限り

身障を慰める友の頬が濡れ

ようやくに蜻蛉捕えた子の腫

裕福なやがてへ耐える子沢山

高野明子

人の粗拾えば自己の粗も見え

生甲斐を心で語るかがやく腫

笑い泣き流す涙の美しくい

晩秋の省エネ部員に陽の恵み

押入れをすっきり片づけ茶に座り

鎌田娘雀

一日がこんなに永いベッドの灯

甘酒でカラオケ唄う下戸でよし

度忘れし二度手間かけたお買物

何事も妻意に解し明日へ生き

風花が耳へささやく冬の使者

大橋やす

かさこそと落葉探れば声がする

冬囲い急げ急げと霰降る

軽口を叩いてひとり頬を染め

貧しさへ折れば神の灯が燃える

カラオケへ拍手の渦へ酔うてくる

(職員) 長内恵美子

仲人をして人生を振りかえり

子供の母親の善悪見究める

ツマになって妻は刺身をひき立てる

人生は援けられたり援けたり

平山徳生

何もかも身に沁む秋の暮れ早く

散歩道雲の流れに歩を早め

散歩道犬も知ってか先に立つ

成せば鳴る成さぬ心の情けなき

藤久悦

一寸した言葉が胸に突きささきり

初霜の感触今年の秋耐ける

只管に生きる姿が美しい

お馴染みの顔がカラオケ盛り上げる

〔選後感〕

皆様がお年を召されたように、私

もすっかり齢を取りました。まだボ

ケるところまではいっていませんが、

満八十四歳の辰年です。ここの柳壇
 とのおつきあいも五十年を越え、選
 者の中でも只一人の生き残りになり
 ました。目と腰痛の療養で、六十八
 年間も各句会へ精勤していた私が、
 六十二年は名古屋川柳社、みなど句

会、ながせ川柳会の例会出席を十カ
 月も休んでしまい、皆様にご心配を
 かけたが、もう大丈夫です。鈴木可
 香はまだまだへたばりません。机上
 出句では三十三、四吟社へ送句精勤
 しています。活字になった作品だけ

で十一万句は下りません。それでい
 て個人の句集は一冊も出していませ
 ん。余り自慢の出来ない本当の話で
 す。

忘年句会 北柳吟社

宿題「満点」

五客

藤 久悦選

(職員) 清

満点でも表わせぬ人の良さ

満点を努力で取った千代の富士

満点と言われててれる古女房

女房に満点つけて浮気もの

満点と思つた女性まだ嫁かず

人位

気分満点ナースの笑みが脈を打ち

地位

満点で通つた試験怪しまれ

天位

障児マヒ励む五点の通信簿

宿題「雪女」

五客

(青森) 野沢 省悟選

明子

千秋

ゆきを

(青森) 久五郎

草人

草人

徳生

(職員) や

聖一

娘雀

やす

明子

(職員) 清

久悦

やす

草人

久悦

久悦

(青森) 省悟

久悦



「若い」を考える (2)

—老化について—

後藤 昭

「老化」という言葉がある。
人はこの「老化」という言葉を何気なしに使っているが、さて「老化」とは何か、とあらためて聞かれるとすぐには答えられない。簡単なように、あるいは当たり前として思っていることが、難物ということが意外に多いものである。

さて「老化」とは何か。

成熟期以後の生体の変化、とする説がある。人は生まれ、そして成熟し、次いで老化の道をたどる。これだけの説明では、言葉のすりかえに過ぎない。だまされたような気がする。もう少し親切な説明はないものか。

成熟期を過ぎると、体を構成する細胞の数は減少し、細胞の中の水分量も少なくなり、個々の細胞の活動力が衰えてくる。このような変化は、進む一方であり不可逆的なものである。

これが「老化」というものである。

くどいようであるが、もう一度言葉をかえて説明を試みよう。

「老化」というのは、成熟後に起る個体のすべての変化をいい、構成の変化、機能の変化のすべてが含まれ、時間の経過に伴って起る不可逆的で退行性の性質をもつものである。この結果環境への適応の低下がもたらされ、環境のストレスに勝てなくなり、死の確立が増すに至ることになる。

少しはおわかりいただけただろうか。

ところで、「老化」という現象は何故起るのか、学者はいろいろと考察をめぐらした。大きく分けて、およそ六つの説が代表的なものである。面倒な言葉が少し続くが我慢していただきたい。以下に並べてみる。

〈消耗説〉

細胞が働くに消耗する。呼吸栄養などの働きで消耗した部分が補修再生されるが、それが以前の状態に及ばないために、構造機能が低下してくる。

〈代謝産物沈着説〉

代謝の結果出来た老廃物が、細胞の中にたまり機能が低下してくるとの考え。

〈ストレス説〉

ストレスが細胞に働いて、その結果老化が起るとの説。

〈結合組織説〉

栄養物質を実質細胞に行きわたらせる役目をもつ結合組織の機能が低下し、そのため栄養が行きわたらなくなるとの説。

〈突然変異説〉

体細胞の染色体に何らかの突然変異が起った場合に老化が起るとの説。

〈自己免疫説〉

個体固有の細胞が抗原となり体内に免疫現象が起る事を自己免疫というが、これが原因となり老化が起るとの説。

以上のような説があるが、何れも単独では老化を説明

できず、幾つかの要因が重なって老化の現象が起るものと考えられる。これからの研究に負うところが大きい。

いささか退屈な事柄の説明が続いたが、要するに「老化」の現象については知られているものの、それがどうして起ってくるかについての情報を私たちはあまり多く持っていない、ということ述べたかった次第である。

常識的に、心身の正常老化（自然な老化と考えてもよい）が始まる時期を初老期（四十五才から六十四才まで）といい、正常老化がはっきり表面にあらわれる時期を老年期（六十五才以上）といっている。

初老期や老年期では、心身の働きが多かれ少なかれ減退してゆく。したがって「老化」とは心身の機能の「喪失」を意味する。

老人の身体変化では、予備力・防衛反応・回復力・適応力それぞれの低下がある。

予備力というのは、普通の生活では使用しないそれ以上の力を人間はもっているが、これが老人では著しく小さくなり、余裕なく精一杯に動いているという事になる。

防衛反応というのは、外からの刺激に対して防衛する能力であるが、老人では抵抗力が小さくなる。

回復力は説明の要はないと思うが、幼時などでは疲れても一寸休むとすぐ回復するのに、老人ではなかなか回復しなくなる。

適応力は周囲の環境にすぐ慣れる能力であるが、老人ではそれが難しくなってくる。

以上の他、老人ではいろいろな身体の働きの低下がみられ、老眼、耳が遠くなる、運動能力の低下、性欲の低下、骨がもろくなる、脱毛などが見られるようになる。病氣にかかりやすく、なおりにくい。

老人の精神的变化では、昔のことはよく覚えていての最近のことは忘れやすいということが目立つ。しかし精神作業の内容や確実さは殆ど低下しない。常識、判断力などもよく保たれている。一方精神的な柔軟性、適応力などは低下することもあるが、環境の影響もかなり大きい。

老人の性格変化もよく問題にされるが、それは環境やその人の心理的原因による変化による部分が大きいとされている。ということは、老人をとりまく社会のあり方と老人自身の社会への働きかけの如何が、大いに関係

あの遠い日から (四十九)

菊池 盈

骨を削る (上)

春から天候不順で、気温は上らずおまけに長雨が続いた事から、今年の区作は疑いもないだろうと、誰もが予測していたように、昭和九年の年は、東北地方全域に亘っての大区作でもあった。おまけに台風の被害も相当

すると云える。

以上、「老化」の定義・要因・心身両面へのあらわれ方を述べて来たが、もう一度「老化」の特徴をあらためて考えてみたい。

まず誰にも表れるという普遍化、しかしながら、それぞれの人に特徴のある老化が表れるという固有性、少しずつ進行してゆくという進行性、その人にとって具合の悪い有害性、以上四点にその特徴はまとめられる。

誰にでもあらわれるが、それぞれの人によって特徴のあるあらわれ方をし、少しずつ進行し、人間にとってはあまり有難くないものという訳である。

(この項つづく)

(筆者・青森県立つくしが丘病院長)

なものであった。中でも私の村は県内でも屈指の被害を受け、農家は塗炭の苦境に追い詰められた。米の収穫高も、郡全体が二六三Kに対し僅かに一九〇K、反収三俵そこそこでは飯米が精一杯という、惨嘆たる状態であった。

東京の各新聞社は、この窮状に対し、広く全国に救援を呼び掛け、食糧品等を加え当時の金で数百万円を集め、東北の農家の救済に当った、ともの本には認めている。私の村の割当では、報知新聞社が一六九円五三銭と甘藷一五〇俵、朝日新聞社が二二二円十一銭とメリケン粉大

豆その他の物品、東京日日（今の毎日）新聞社が一四四円二七銭と各社よりそれぞれ割り当てがあった。甘藷一五〇俵の割り当ての中、貧しかった私の家でも、その中一俵を父が頂いている。外に何がしかのお金も頂いたはずであるが、金額についての記憶はない。

だがこの時、私は医者から甘藷を食べる事を禁じられて居、不運にもこの恩恵を受ける事が出来なかった。入院中、父が甘藷を購入して来て、私に食べさせようとしたのを医者が見付け、

「こいつを食べさせるなんてとんでもない事だ、これは腐り易いものだから絶対に食べさせちゃいかん」

そう言われて甘藷を食べる事を堅く禁じられていたからであった。

当時甘藷と云えば、田舎ではお菓子に匹敵した珍重な食べ物で、何処の家でも始終食べているというものはなかった。貰っては見たものの実際に父の心は痛んだ。のどから手の出る程食べたがっている私を前にして、自分一人で食べるという事に、流石の父もためらいがあったか、容易に食べようとはしなかった。二、三度蒸して食べただけではなかっただろうか。

「治ったら食わせるぞ」

そう言つて、俵から丸で盗みでもするように、こっそりと甘藷を取る父の手が、幽かに震えている風でもあった。私への氣遣いが、どれ程父の良心を苛ました事であらう。

親としてとても一人では食べる気になれなかった父は、甘藷に対する知識もないまま、腐らせては不味いと思ひ、炬燵に俵ごと布を被せて保存をしたのであった。父の頭には、暖かくさえして置けば甘藷は腐るまい、と思つていたからである。

数日経つて、変な臭いがする、というので俵を開けたところ、甘藷は火熱りが強かったか、半分以上も腐つていた。暖かくした事が逆に甘藷を早く痛ませたものである。私への氣遣いと思ひ遣りで、自らも食べようとしなかつた父は、腐れた俵の藷を見て、いかにも残念そうに、「馬鹿な事をしたもんだ」と自嘲し、俵を庭へ運び甘藷を一本一本取り出して、腐つた部分を包丁で切り落とすのであった。藷に依つては全然食べられないものもあつた。

この事があつてから、父の心は急に変わった。堪え切れなくなつたのもあらうか、

「いいから食べろ」と言つて腐りかけた甘藷を蒸して私に食べさせた。なまじ医者の言う事に固執したばかりに、折角頂いた甘藷の大半を腐らせてしまった事に、大きな憤りを覚えたのもあらう。

この頃、私は親戚より借りた松葉杖を使って、歩行が出来るようになっていた。だが、足は何んとなく庄迫感があつて重く、氣分的には毎日が苦痛であつた。相変らず切開した傷が二か所、一糶五糶位になつても一向に治癒する兆もなく、毎日がガーゼを交換しなければならな

かった。だから足からは繻帯を外す事は出来なかった。

貧乏と、長い看病の疲れがあったか、父は家に戻ってからめっきり老けた様に見えた。病院では大根飯や南瓜飯は食べはしなかったが、家に戻れば、とても病院での真似など出来る状態ではなかった。毎日が糠飯と、塩を混ぜて引き伸ばした味噌汁で、外に栄養となるものもなく、生命を維持するぎりぎりの生活の為に、父の体は疲弊し切ってしまったのである。

それでも父は、遊んではいられなかった。私という病人を抱えて、厳しい冬へ向かっての準備を、先ず第一にしなければ、凍えてしまう事が目に見えているからでもあった。

第一に薪を取らなければならない仕事が残っていたのであった。春に取って蓄えて置いたものが留守中にすっかり消えて小屋の中は全くの空になっていたからであった。田や畑は、人を頼んで片付けたので、負担は軽く済んだものの、僅かな田圃からの収穫はゼロに等しく、肥料代はおろか、手間賃にもならなかった。粃を唐箕で吹くと、殆どが殻で飛び散り、米になる部分は、殻粃の三分の一もなく、唯々呆然とするばかりであった。分けても私の家の田圃は、借金から逃れた田であり、山ノ手に面し、水も冷たく、元々瘦田で期待の出来る程収穫のある田圃ではなかったが、この年の被害は筆舌に尽し難い惨嘆たるものであった。

こうして悲しみばかりが多かった昭和九年が過ぎ、亥年となる十年を迎えた。雪が降らず凌ぎ易い年明けでもあった。欲しいと思つた少年倶楽部の新年号も、どうにか父が買って呉れたので、私は天にも昇る思いでもあった。着物の裁ち板の様に折りたたんだ、のらくろと冒險ダン吉の付録が、何んとしても欲しかったので、手にした時の喜びは例えようもない程であった。絵はがき印刷版もこの時の少俱についた。誌代は五十銭だと父が言った。普通は四十銭だから豪華な付録の為に十銭高かったのもあろう。

当時の雑誌は、付録を以って読者の眼を引き寄せる巧な販売方法を用いていたので、子供心には翌月号ものどから手の出る程欲しいと思うのだが、貧しい父の懐ろを知っているだけに、私はそれ以後父にせがんだ事はなかった。父も又購入しては呉れなかった。

この年から三銭の切手が四銭に、一銭五厘のはがきはがきとなって二銭に値上げされた。切手の衣裳は、四銭が東郷元帥で二銭が乃木大将であり、はがきは楠公の銅像であった事は、戦前の人なら誰でも記憶に新しい事であろう。

退院してから幾日経った頃であろうか、毎日治療をしても一向に治る気配さえなかった傷口に、ゾンデーに触れる白い骨片の様な物が見え、ピンセットでつまみ出すと、二種位に砕けた粉れもない骨が腐って出るのであった。それは脛の上下にある二箇所から、毎日のよう

につまみ取れるのであった。

青村鉄太郎医師が、

「之から骨が腐るのだ」と父に向かって言っていたように、真正正銘その時期が来て、表面に現われ始めたものである。だから傷口は如何なる処置をしても治るはずがなかったのである。

碎けて出る位だから、脛の骨は、腐れてポロポロになつてしまったのかも知れない。だが症状は、重症感だけで痛みはなかったのである。

治療する度に、幾片かの骨片が出るので、父の心は動転していた。この俣では私の足が腐れて無くなる、と父は思っていた。しかし父は今の自分ではもうどうしようもないと思つた。数えて六十三歳になつたばかりの父であつたが、現代の八十代に匹敵する程に、老いを感じさせ腰も余計曲がつたようにも見受けられた。

幾日か過ぎた。多分父は気懸りで眠れぬ夜を過ごしたのではあるまいか。意を決して、妹のアイ（叔母）に長い手紙を書いた。叔母の家は十軒そこそこの道のりではあつたが、今の父にはとても歩いてゆける状態ではなかつた。帰りがけの郵便配達夫に、特に頼んで届けて貰つたものである。私の家が、部落の一番奥の外れにあつた事から、郵便があつてもなくても、郵便屋さんには私の家を宿にして、昼の弁当を食べていったものであり、その点父は気安く依頼出来たのである。

津軽の雪ッコ

長内 恵美子

寒^ヤビエ^ド処^シさ 白^シエもの 降^オぢれば
少女^メ達^ドよろこぶ^ダッテ 父^オだの 母^ハだの
猫の手^テッコ^コかり^テエ程 忙^ハがしくつて
ロ^コッコも聞きたく^ネエ^ジャ 本^タ当^ノ話^ハッコ

今^{イマ}の少女^メ達^ド ロ^バっかしい^イた^ッて
カ^コッ^バかし^ツつて 手^テ伝^ウこと^シネ^エ
雪^{ユキ}ッ^コ見^レば ス^キー^ニ行^クと^イう^シ
た^ダス^キー^バかし 買^ウんで^ネエ^ンダ

昔^キゴ^ムの靴^ケさ ス^キー^バハ^エデ^ズべ^ッた^ケド
今^{イマ}だ^ッキ^ャ 上^ウ下^ゲの^スキ^ーウ^エア^ツて^物あ^つて^や
た^ダ 銭^ゼン^コか^かる^もん^デネ 少^オ女^メ達^ド大^キく^する^に
寒^{サム}ビ^エ処^サお^かれ^ネエ^シ 電^{デン}気^キ代^ダから^灯油^ア代^カさ^むべ

雪^{ユキ}ッ^コか^たづ^けに^も銭^ゼン^コか^かる^し
空^ソッ^ポ病^ヤみ^して 雪^{ユキ}ッ^コ除^ケネ^デい^れば
家^カッ^コつ^ぶれ^るし 一^イ寸^サ先^サも^見え^ない^程地^チ吹^フ雪^{ユキ}ッ^コ続^ク
や^っぱ^し 暑^ヒい^処 暑^ヒい^ナァー 津^ツ軽^キの^雪ッ^コヨ^ヨ!!

身延のかがり火(十七)

——ハ病の救聖僧綱脇上人伝——

野中武社

——周辺の杉林に雪が激しく降りかかるその日、東京の守屋上人から手紙がきた。綱脇上人が東京の大学に通っていた頃、守屋上人と一緒に東京の貧民窟を視察して、その貧民達を将来二人で救済しよう……と手を固く握り合つたことがある。

その後、守屋上人は東大を卒業し、日蓮宗では初の文学士の資格を得、日蓮宗大学で教授をしていた。その上人が寄こした書面の内容は、次のようなものである。

《毎日大学で哲学や宗教学の講義をしても、何か心の奥に自信がなく困っている。これは恥しいことだが、私に信仰上の安心が確立していないからで、生徒から真剣な信仰上の問題の質問をされても、本当の指導が出来ない気がして弱っている。

そこで君にお願いがあるのだが……。実は大学の講師を止めて君の病院で修業を積みみたいと思うのだが、受け入れて貰えないだろうか？》

達筆な文字でそうしたためられている。

思いもよらない申し出であった。守屋上人は十分に悩みかつ熟慮した上で、この手紙を綴つたのであろう。そのような真剣みが、文面から汲みとれる。

大学教授の職務を投げ捨てて救ライ事業の手伝いをしたい……というその心は、黄金よりも美しく、尊いもののように思われた。綱脇上人には、この申し出に異存のあらうはずはなく、

〈君に病院の手伝いをして貰えれば、この上なく幸せだ。しかし慈善事業なので報酬は一銭も出せないが、それでよかつたら来て貰いたい！〉

そのような旨をしたためた返書を、折り返し送付したものである。

——水色の衣を身に纏つた守屋上人が、深敬病院へ移ってきたのはそれから間もなくの事であった。どちらかと云えば学者肌で物静かな守屋上人に、深敬病院の事務一切を担当して貰らう。事務仕事だけでなく、彼は患者の治療に当る綱脇上人の手伝いをも率先して行なつたものである。また夜ともなれば毎晩病室に籠り、患者を慰問する意味で法話を施したりもした。患者達はそんな守屋上人に対して、綱脇上人と同様、心から感謝しかつ又尊崇の念を抱いたことである。

——患者達が寝静まつた夜遅く、綱脇上人と守屋上人は近くの清今寺へ戻つた。

「何分にも病院が手狭まなので、わしらは患者と一緒に寝起き出来ないが、しかしこれはあく迄も暫定措置で、ゆくゆくは患者と寝起きを共にする施設を創る考えであります」

綱脇上人は守屋上人と一緒に疲れた体を清今寺の一室

に横たえ乍ら、胸の裡を明かしたことであった。

—深教病院に馴染んだ頃、守屋上人は身延山の祖山大學から頼まれて週に四時間ばかり哲学の講義をし、月に十円の礼金を得るようになった。他かに清今寺の監督料として月に二円を得、合計十二円が守屋上人の収入源となる。その収入の中から彼は、十円の金を毎月師匠の許へ送り、二円の金を小遣いに当てたものであった。

救ライ事業の手助けを、あく迄も無報酬でして呉れる守屋上人に対して、綱脇上人は心から感謝した事は言う迄もない。

綿雪が濃密に降りしきる朝早く、綱脇上人は蓑を着、頭には饅頭笠を被り、山梨県の県庁所在地である甲府市へ行った。

深教病院の運営費は、寄付金に頼らなければ成り立たない。

そこで救ライ施設を創立した直後から、彼は山梨県警本部へ寄付勧募に関する許可願書を提出していたが、どういうものか願書は付箋付きで返送されてきた。

「こんな筈はない……」と、再び願書を送付すると、やはり返送されてくる。そんな繰り返しがずっと続いていった。こんな事では救ライ事業は行き詰ってしまう。不安にかられた綱脇上人は、直接県庁へ訴え出るしかない……と腹を決め、この日甲府市へ出張した訳である。

まず県庁内にある保安課を訪ずれ、

「寄付勧募の許可願書を再三再四県警に提出したのですが、すべて梨のつぶてであります。これは願書拒否ということでありましょうか。それにしても、どういう理由でそうなっているのか本日お伺い致した次第です……」

丁重に綱脇上人が訴えると、
「ほう。しかし、私共の許にはそのような願書は届いておりませんな。一応調査してみましよう……」

でっぶり肥った保安課長は、鷹揚に応える。課長は調査した上で後日返答をする……というような態度を見せたが、それでは困る。綱脇上人にとって、雪降る中わざわざ四十数キロの道程を歩いて甲府へ来たのには、この際はっきりした返答を得んが為であった。出来れば今日中に、確かな返答を持って帰りたい……そんな腹づもりの彼は、

「出来ましたら、県警本部長に会わせて載きたいのです……」

と率直に申し出た。

「よろしい、お会いしてみなさい」

思いがけなくも保安課長は、あっさり承諾する。そしてすぐに電話で連絡をとって呉れた。

県警課へ行って県警本部長に会ってみたが、そんな願書は届いていない……と言うばかりで、一向に掴みどころがない。綱脇上人はほとほと困惑してしまった。こうなれば県の最高権力者である知事に会うしかない。そう思った彼は、

「誠に恐れ入りますが、知事に会わせて載けないでしようか？」

と、ここでも五十年配の県警本部長に同じことを言った。

「解りました。一寸待って下さい。知事の意向を伺ってみますから……」

県警本部長は躊躇もなく、電話器に手を伸ばす。保安課長といい、県警本部長といい、綱脇上人に対して意外な程の好意を示したが、それは相手が僧侶であったからかも知れない。それとも彼が余りにも真剣な態度を見せた為であろうか。

県警本部長は電話で何やら話をしていたが、その内に電話を切り、

「お会いするそうですから、ここで暫く待っていて下さい」と言う。

県警課で三十分ばかりも待ったであろうか。ふと一人の女の事務員が来て、綱脇上人を知事室へ案内した。

知事室へ入った途端に、綱脇上人は一瞬息を呑むような思いを抱いてだしろいだ。今しかだ会ったばかりの保安課長や県警本部長を混じえた県庁主脳部の面々が、ずらり椅子に掛けて知事の両脇に並んでいたからである。県庁主脳部は、今迄緊急な重大会議でもしていたのであろう。そんな様子が伺われた。

輝々たる主脳部が集う知事室内の壮観さに圧倒され乍

らも、綱脇上人はソファーに深々と身を沈めている知事の許へ、つかつかと歩み寄った。

「私は身延山で救ライ事業を成して間もない一介の僧侶であります。救ライ事業を始めた動起については、身延山で乞食同然の暮しを予儀なくしている気の毒な患者を私は無視する事が出来ず、小規模乍らも病院を創りその救済に着手した次第であります。しかし救ライ事業といっても、理解ある方々のご援助を仰がねば運営は出来ないであります。そこで寄付勧募の願書を県庁内の機関に提出しておりますが、一向に明瞭なる返答がなく、ご無礼とは存じつつも本日来庁致した次第でございます。今申し述べた私の趣旨をお汲み取り下さいまして、どうか是非寄付勧募の許可をお与え下さいませよう、改めて懇願致す次第であります」

黒色の背広を流麗に着こなしている六十歳前後の竹田知事に、真剣にかつ率直に訴えたと、

「貴方の言う事は良く解りました。よろしいでしょう。早速許可をお与え致しますよう。」

と言った。

今迄関係機関から返答を得るのに随分と手古ずってきただけに、知事から呆気なく認可されてみると、綱脇上人は一瞬拍子抜けを覚えたものだ。それと時同にはっとするような思いが、急速に胸の中に広ったことである。

「君達は、もう退場してよろしい」

寄付集めの認可をしてから、知事は部下を退らせると、

「綱脇さん、もっと傍へ来なさい」と、穏やかな口調で促した。

「貴方は大変な難事業を、よく始められましたな。色々苦勞も多い事でしょうが、どうか身体に充分気をつけられて、せいぜいお骨折り下さい」

竹田知事は二人だけになると、救済事業に思いがけなくも理解を寄せて打ち解けた様子で励ますのであった。「ところで、今夜はどこにお泊りですか。もしもお困りでしたら、私の所にお泊りなさい」

尚も知事は親身になって言う。

「いえ、何も心配は入りません。市内のお寺に泊ることになっておりますので……」

「そうですか」

知事は安心したようににこやかに頷く。

思いもよらない度量の大きな、しかも情深い知事に接した綱脇上人は、心温まる思いを抱いてその場を辞したものであった。(つづく)

シンガポール・インドネシアの十日間

(八)

—らしい事情視察研修に参加して—

大 高 興

(本園内科医長)

十二月七日(日)デンバサール。そして観光

午前七時三〇分、朝食をハイヤットホテルで済ませ、

同八時三〇分、チャーターバスでスラブヤ空港に向かう。

九時三〇分空港着。メルバチ航空三四八便は一〇時三五分離陸し、バリ島デンバサール空港に一一時三〇分到着。

出迎えを受けて、ヌサ・ドゥアビーチホテルへ。

お昼の一二時、レストランで昼食し、午後から観光に出かける。金銀細工のチクル村。木彫のマス村。バリ絵画の村ウブドなど芸術の村々を見、「聖なる水浴場」として有名なタンパクシリングを訪れる。数年前までは僧

侶が水浴したそうだが、今は禁じられて柵をめぐらしている。湧水は透明であるが、一面に藻が生え茂り、小魚が群遊している。境内には立派な寺院が建ち並び、拝観者は腰に黄色の紐(有料)をタテ結びに結んでもらって拝観が許される。恐らく浄めとお守りの意味だろう。近くに住民が利用できる大きな露天風呂状の水浴場があって、一〇数人の女、子供らが利用、パンティーをはいたまま体を洗ったり、衣類の洗濯をしていた。この付近には特に安物の土産品を立ち売りする人が多く、視線が合ったり、値段を聞こうものなら大変である。そのシツ

コサに啞然とするばかりであった。

デンバサルから約六八キロの距離に景観の優れた、キンタマーニ高原があるそうで、タンパクシリングからはあまり遠くないらしい。名前が面白いので、多磨全生園の中谷先生同様、探訪したく思ったが時間が無いとかで許可されず残念だった。

午後八時、ヌサドアビーチホテルの野外レストランで夕食。ステージのインドネシア舞踊に見とれていたわけではないが、舞踊が終わると、主役の舞姫がツカツカと私たちの席にやって来て、私を指し、一緒に踊る仕草をする。皆にすめられて舞台上上がり、踊りを習う。歌の文句ではないが、まさに椰子の木蔭で何んとやら……で、よい思い出になった。

夜一時過ぎ、高屋教授らとプールに行く。このホテルの裏、海岸近くに大きなプールがあり、外人さんも泳いでいた。私はプールに足をひたし、時々シャワーを使った。砂浜に出て遠く印度洋を望んだが、暗くて沖合がよく見えない。この位置にいと、夜一二時頃から翌四時頃まで右手斜め上に南十字星が見えてくるというが、疲れていたので部屋に帰り、星を見ることが出来なかった。

浜の砂は白くきれいで、遠浅の海水が澄んでいる。波打ち際に、小さな蟹が動き回っている。体が小さい割にハサミの力が強く、狭まるとびっくりするほど痛い。潮の引いたところから貝やサンゴの塊を拾って持ち帰る。

十二月八日(月)デンバサールの厚生省保健局とバリー
ンらいりハビリテーション病院とらいコロニーを見

学

ここバリ島は、人口三〇〇万人といわれ、幹線道路は日本から熊谷組が来て作っているという。バリ島は、さつま芋、椰子、米などが採れる。観光客はオーストラリアからが最も多く、次いで日本から新婚さんが多いとのこと。

日本からは年間六万五、〇〇〇人ぐらい来ているが、日本航空は未だバリ島に入っていない。しかし、今年(S・六二)辺りから、大阪ーバリ間が認可されるかも知れない。インドネシアへの入国は現在でもビザはいらない。デンバサルは太平洋戦争のとき、一時は日本軍の植民地になったこともあるが、一九四五年八月、インドネシアが独立してからは再び活気を取り戻したとかで、現在では古い王宮がホテルになったりしている。市内には「フソウ」のマークを付けたトラックがやたらに多く走っている。バイクには三人まで乗れる。ガソリンは一リットル約四〇円。バイク事故が多いため最近ヘルメット着用を義務づけている。「スズキ」のバイクのポデーは当地で造られているという。

現在、五ヵ年計画で産児制限が行われている。インドネシアには僧侶が非常に多く、村人から食物をもらって生活している。僧侶の位階は四階級あるが、僧侶になるための学校は無いとのこと。デンバサル村内の映画館

の看板にお化け映画の案内があった。その看板絵で、インドネシアのお化けには足が無いことを知った。
私と親しくなったインドネシア人ガイドに、らい患者の埋葬法を聞いてみた。すると彼が悲しげに言うには、自分の血縁者にも、らい患者がいたが、死体は祖先の墳墓には入れてもらえず、不浄の身として一般人の火葬場で

も焼いてもらえなかったもので、海岸の波打ち際に埋められました。深さは約三メートルで土葬です。従って、らいで死んだならば、永久に祖先の墓には埋葬されることはありません。ちなみにインドネシアでは、小さい子供や結婚に破れた、出戻り女性も祖先の墓には入れてもらえずに、一家の墓域の隅に埋葬されるという。

園日誌 ○印 自治会

11月	11月	8日	ク教会) 他四回	16日	員研究協議会(八戸) 理教会)
1日	佐藤光男司祭来園(聖ミカエル教会) 他七回	10日	昭和六二年度ハンセン病療養所介護員研修会(10~13日) 多磨全生園	18日	園内消防訓練
2日	高橋博先生診療援助(眼科) 他六回	11日	中谷先生診療援助	19日	東北管内施設ボイラー技士講習会(19~20日) 東北地方医務局
4日	福士六郎先生診療援助(内科) 他三回	12日	藤楓協会主事(大村鶴子氏) 来園	23日	石田吉男先生来園(松丘聖生会)
5日	岡村宣伝道師来園(松丘聖生会)	15日	青森県准看護婦養成所看護教	24日	白川順子氏来園(カトリック)
7日	ラヴオア神父来園(カトリック)	12日	竹村竜治先生診療援助(婦人科) 他一回		
	〇第三・四半期予算説明		〇保健科運営委員会開催		
	〇不自由者寮入居者対象小菊展		〇全医労松丘支部大会(会長出席)		
	会計班長等会議(5~6日)				
	〇防犯査察				

教会)

〃 〇予防法問題小委員会へ会長出席

25日 厚生省保健医療局業務調査
(25〜26日)

26日 厚生保健医療局山本係長外二
名来園

〃 〇会長帰任

27日 新ボイラー火入れ式

28日 デュベ神父、ランドルビル神
父来園(カトリック教会)

29日 田崎安男主教、田崎景子氏来
園(聖ミカエル教会)

29日 〇自治会役員選挙の要請

あとがき

△謹んで新春の賀詞を申し上げます。皆々様の御多幸をお祈り致し、合せて今年も何卒よろしく御指導御協力をお願い申し上げます。

△本号は年の初めの発行ですから、多くの関係者より御繁忙の処御執筆を賜りました。ここに厚くお礼を申

上げます。

△さて、高齢化社会と云われる今日、特に平均年齢が六十五・九歳の本園のその高齢化対策は、高齢化人口を牛歩のように後追いつている感を禁じ得ないのです。

△こうした現象の起因には多種多様の側面があるのでしょうが、入園者の半数以上は、特、重、中、軽の切替不自由者棟に入居し、職員による生活介護を受けて居る現在切替えしてから二十五年以上(S・37・平均年令四十六・三才)も経たその間に大きく変わったのは医局管理であったものが福祉室への移行です。

△当所の入居者は、視力障害者や、身体障害者が大部分であり、痴呆症の入居者は確か居らなかった。従って介護内容も今日のように介助も多くなかった。勿論、成人病とか、老人性痴呆症等に対処するといった介護員に対する研修指導も少なかつた訳ですが、そういった介護内容に少しずつ肉付けして今日に至ったのです。

△そのような次第ですから、高令者に対する介護の基礎的教育、実地指導のとぼしさに加え、施設側と医療労働者側との力関係等々で、二、三日も床にふしたり夜間に異常を訴えたりすると直ぐ入室させる!!といったような風潮をどのような作業で打破するかが、高令化社会における本園の老人性痴呆症防止の今日的課題であるのではないのでしょうか。

△兎も角、この高令化社会の中の本園に生ある限り、介護を受ける側も、それを行なう側も、今、何が必要か、何が欠けているか、何を研修又は会得しなければならぬかを、今一度おのれ自身の次元で模索の年にしたいものです。
(天地)

発行所 財団法人 松丘保養園慰安会
(郵便番号 〇三〇一〇二)
所在地 青森市大字石江字平山十九番地
(電話(0177) 080-145-0146)

振替番号 松丘保養園慰安会内申田の振替編集局
盛岡 四一六一七八

発行人 阿部 慶次郎
編集人 天地 聖一
印刷所 青森市大字幸畑字松元六二ノ三
青森コーピー印刷
電話(代) 080-2211番
定価 三三〇円 千二二〇円